

# ソーシャルワーク理論とイデオロギーの枠組み

——マイクロとマクロの二又構造を橋渡しするアプローチ——

田川 佳代子

## I. 問題提起

これまで以上にソーシャルワーカーに必要とされているのは、経済のグローバル化や新自由主義の政策によってもたらされる不平等や抑圧の本質を見極めるための知識といえる。グローバル資本主義は、一握りの人々に世界中の富を集中させ、貧富の格差を拡大する結果をもたらしてきた (Mullaly, B. 2007: 6-11)。

国際貿易の自由化は、社会的・経済的・政治的な政策と利害関係のある国民・人々の政策決定への参加というよりもむしろ、国境を超えて利益を追求する多国籍企業の資本蓄積とその影響を強めた。大企業は生産の効率性を高めるために、可能な限り労働者の賃金や手当を低く抑え、不況時における雇用調整は、労働者にとって失業や収入の喪失の脅威となり、労働組合や連帯の力を削いできた。

また経済のグローバル化は、一国の社会保障の性格や形態に変化を及ぼした (岡本 2004)。欧米先進諸国では、経済不況による歳入不足でも、社会的支出を増大し続ける福祉国家の在り方に批判が集中し、財政赤字の状況を増税ではなく、政府支出を切り詰め削減することによって打開しようとする右派政党の台頭が相次いだ。1979年の英国におけるサッチャー政権の誕生に始まり、1980年の合衆国におけるレーガン大統領の就任にみられる。わが国においても、1980年代以降、経済のグローバル化が急速に展開するなかで、福祉国家の中核をなす社会保障制度をはじめとする諸制度は、新保守主義の攻撃にさらされてきた。

小さな政府の実現に向けた、国の社会保障給付費の抑制は、国家責任の後退と地方自治体への財政負担の転嫁となって、財政力や財政基盤の弱い自治体に影響をもた

らしてきた (武田 1989)。住民やサービス利用者にとっては、必要な社会福祉諸施策の縮小や削減、給付内容の低下や資格基準の引き締めの影響を被る人々が生ずる一方で、他方、国民の租税や保険料負担、サービス利用の際の受益者負担の実質的な増加が求められてきた。さらに社会福祉や介護・保育などのサービスの民営化が推進され、市場への参入規制の撤廃や競争原理の導入が促されてきた (八代 2000)。

社会福祉サービスの提供に第一線で携わるワーカーと、クライアントの置かれる社会的脈絡には、異なる性格と形態のソーシャルワークが、混在するようになった。Ife が言うように、ヒューマン・サービスの脈絡には、「経営管理」のディスコース、「市場」のディスコース、「専門職」のディスコース、「コミュニティ」のディスコース (Ife 1997) が競合しあう。ところが、わが国では、ディスコースによって異なる福祉国家の理想像や受益者の定義、あるいはソーシャルワークの役割・責任・方針等の違いなどについて、意識的な議論がなされることはあまりない。異なる性格や形態のソーシャルワークは、優勢なディスコースに覆われ、そこに存在する差異は目立たなく沈潜化させられている。

Lundy は、「ジェネラリストであるという相対的な合意の一方で、ソーシャルワークとクライアントのニーズに最も役立てられる実践の枠組みに関しては意見の相違が存在してきた」 (Lundy, C. 2004: 39-40) と指摘する。

ソーシャルワークにおいてイデオロギーは、問題の定義、ソーシャルワーク実践の土台となる価値観や信念を形づくるものと考えられる。異なるイデオロギーを比較検討することは、今日優勢なパラダイムを客観化・対象化するために役立てられる。ソーシャルワークの諸理論/アプローチとイデオロギーの関係を認識するための枠

組みについて調べることは、ソーシャルワーク理論の再編にとって不可欠な部分となる。

欧米では、ソーシャルワーク教育のマクロとミクロの分裂は、研究や実践において不必要に限定的な焦点を強調するものであるという批判がある。なかでも社会正義を探究し、臨床的な脈絡に潜む権力や抑圧の問題を適切にとり扱うには、ソーシャルワークの二又に分けられた構造は統合されるべきものと考えられる (Vodde, R. and Gallant, J. P. 2002)。

わが国のソーシャルワーク教育も同様に、マクロとミクロの構造に二分されてきた。それは制度政策論と方法機能論の2つに代表され、社会福祉やソーシャルワークを学ぶ人々が使用する教科書の内容において反映されてきた。代表的なテキストの説明を引用し、例示してみる。

制度政策論は、「資本主義社会の必然である貧困の再生産過程で起こる問題への社会的対応として」実体概念としての社会福祉を捉え、また「労働政策としての社会政策の補完的な制度として社会福祉をとらえる立場」である。

方法機能論は、「社会体制とは無関係に、人間が社会生活を営むうえで当然生ずる問題として福祉問題をとらえ、それへの社会的対応として社会福祉をとらえる立場」である（「」引用は山縣 2008: 2から）。

ソーシャルワークが真に人々のニーズに応えるものとして実践されるためには、制度政策論と方法機能論の二又に分けられた構造は、橋渡しされ、理論構築がなされるべきと考える。

ソーシャルワークの概念的枠組みに関する作業部会の歴史的な議論のなかで、Gilbert, N. (1977) が述べたように、ソーシャルワークは、社会福祉制度との結びつきにおいてそのアイデンティティを形成してきた。ソーシャルワークにとって、社会システムとの乖離はそのアイデンティティの本質を危うくすると考える。特に、保守主義のイデオロギーが支配的な現代社会において、制度政策論と隔たり、方法機能論に限定されたソーシャルワークでは、ポスト福祉国家の時代に生ずる社会的諸問題に適切に対応することはできないと考える。

当然、わが国のソーシャルワークの理論的發展形成についての分析は、一テキストの引用のみで代表され得るものではない。本稿は、それをを行うために、前もって必要な知識や、枠組みについて調べ検討するものであることを断わっておきたい。

Lundy, C. (2004) は、構造分析こそが実践を強化すると述べる (Lundy, C. 2004: xvii)。それは、個別的諸問題を社会経済的状況や構造的脈絡に位置づけて理解することである。権力の諸相や社会的諸力がどのように圧力や剥奪となるのか、また他の個別的諸問題を生む社会的諸条件となっていくのか、それらについての理解が実践を下支えすると考えられる。人々の抱える諸問題の社会的・政治的・経済的脈絡の分析的な理解を欠くことは、ソーシャルワーカーの視点を個人的問題（個人の欠陥とみなす見方）へと焦点化させ、医療的処置や監視、収容といった社会統制へと導き、進歩主義的な社会変革や社会正義が顧みられなくなると批判される (Lundy, C. 2004: 12)。

本稿は、ミクロとマクロを結びつけるソーシャルワーク実践の理論的枠組みの再編成をめざす研究の一環として、ソーシャルワークの諸理論/アプローチとイデオロギーの関係についての認識的枠組み、あるいは分析的図式について調べ、再検討することを目的としている。まず、今日のソーシャルワークの概念的枠組みに寄与した作業部会の議論に遡り調べることから始めようと思う。

## II. ソーシャルワークのアイデンティティと差異

1977年9月に特別刊行された *Social Work* は、1981年1月発行の *Social Work* とともに、ソーシャルワークの概念的枠組みに関する作業部会の論議を出版したものである。ソーシャルワーク教育関係者が集まり、専門分化する専門職を統合し、ソーシャルワークの使命・目的・共通基盤を明確にし、ソーシャルワークの統合モデルを概念的に体系化することが課題とされた。

Lundy, C. (2004: 38) は、このソーシャルワークの概念的な枠組みに関する作業部会の論議を、イデオロギー的な違いによるソーシャルワークの分裂と捉える。わが国では、このイデオロギー的な差異や分裂について関心が払われることはめったにない。そのため、まず、その議論を遡り、ジェネラリストのなかの、ソーシャルワークの目的、そのイデオロギー的な下支えについての意見の相違について改めて調べ、確認をすることにする。

### 1. ソーシャルワークのアイデンティティの在り処

Minahan, A. and Briar, S. (1977) によれば、1974年5月に、全米ソーシャルワーカー協会は、ソーシャルワーク教育協議会 (Council on Social Work Education) と協力し、専門誌 *Social Work* の編集委員会と共同作業で、ソーシャルワークに関する諸見解を出版することにした。出版委

員会は、多様性のある専門職についての見解を、1つの合意に至らせるのは難しいと考え、ソーシャルワーカーの間での議論や研究を刺激するため、専門職が直面している主な諸問題、ディレンマ、選択肢を明確化し検証する概念的枠組みについて特集を組んだ。

出発点として、異なる視点をもつ5人のソーシャルワーカーに論文の執筆が依頼され、次の質問への応答が求められた。すなわち、1. ソーシャルワークの使命とは何か、2. ソーシャルワークの目的は何か、3. ソーシャルワーカーは目的を達成するために、現在何をしているか、そして何をすべきか、あるいはすべきでないか、4. ソーシャルワーカーはどのような認可・支持をもつべきか、5. ソーシャルワーカーは目的達成のため、どのような知識、技術を用いるべきか、6. 専門職の目的、介入、認可・支持、知識、技術によって、その使命にある実践的、教育的な示唆は何か、である (Minahan, A. and Briar, S. 1977: 339)。

これらの関心は、ソーシャルワークの歴史において決して新しいものではなく、ソーシャルワークの目的、視点、価値、知識、技術、介入に関して一致をみるための長年の取組があった (Brieland, Donald 1977: 341-343)。

Gilbert, N. (1977) は、変動幅のあるソーシャルワーク実践の全範囲を包含するような歯切れのよい概念的枠組みを欠くことが、ソーシャルワークのアイデンティティの危機を招いてきた主たる原因であると指摘した。

Gilbert, N. (1977) によれば、ソーシャルワークの使命は、人々の尊厳や自己決定などの社会的価値を高めること、生活の質や人々の社会的機能の向上並びに回復、さらに人々の自己実現を図ることなどにある。これらの使命は、ソーシャルワークの広範囲な目的の大部分を表し、それは専門職のなかにある大方の合意でもある。しかし、それらの定義が専門職を統合する特徴的な目的概念になるわけではないとし、専門職としての独自性を次のように述べる。

「特徴的な専門職としてのアイデンティティの基礎を構成するソーシャルワーク使命の独自の側面は存在する。この側面は、ソーシャルワークが持つ社会福祉の制度との結びつき、また社会福祉の制度が社会のなかで遂行する機能との結びつきを含むものである」 (Gilbert, N. 1977: 402)。

社会福祉制度は、現代の産業社会のなかで見出される様々な諸悪の被害を被った人々を救済するために工夫された特殊な援助のメカニズムを現す。他の既存の諸制度

である家族、宗教、経済、教育等の援助や資源供給が及ばないとき、社会福祉がその溝に橋渡しをする。社会福祉は、他の諸制度の必要性や失敗への対応によって、安全網として拡張したり縮小したりして働くという意味で、残余的(残滓的)な特徴を与えられてきた。Gilbert, N. (1977) は、それを踏まえ次のように述べる。

「社会における社会福祉の立場とそれが制度として遂行する特殊な保護機能は、ソーシャルワーク援助の使命の特徴的な形態と関連している。制度的視点からの理解によって、専門職の実践を特徴づける多様性や騒動がもはやソーシャルワークの、いわゆるアイデンティティの危機をもたらすものであるというよりは、むしろ、それがソーシャルワークのアイデンティティを形成するものを表す」 (Gilbert, N. 1977: 402)。

## 2. イデオロギー的な差異

1977年9月発行の *Social Work* の論点は、多くの意見や議論を生んだ。しかし現実的なソーシャルワークの目的や目標についての合意には至らず、出版委員会は、ソーシャルワークの目的や目標の提示による展開と、何らかの専門的実践の関心が交錯するところの合意を見出せるかを判断するため、もう1つ別の集団を招集することにした。1979年5月にシカゴの O'Hare 空港で会合は開かれた。様々な専門領域における実践への適用として、学校、保健、家族、産業、高齢者、少数集団、精神保健領域のソーシャルワークに関連するこの問題についての論文が執筆された。この概念的枠組みに関する第2回目の会合に出席した人々から、「ソーシャルワークの目的に関する作成過程の声明」(“Working Statement on the Purpose of Social Work”) が発表され、それに対する意見や批評が求められた (Minahan, A. 1981: 5)。

これに対し、Longres, J. F. (1981) は、「ソーシャルワークの目的に関する作成過程の声明」は、一般的でありすぎると評した。声明は、すべてのソーシャルワーク実践に含まれなければならない諸原理を概観したものであるため、人間的な社会に関心のある人にとって、その声明に反対をする理由は乏しく、ソーシャルワークが自由主義の伝統に根づいていることにも反対の余地はないと応じた。

Longres, J. F. (1981) の主張は、一般的な合意を超える、ソーシャルワーカーの間にみられるイデオロギー的な差異を最小化すべきでないということにあった。ソーシャルワークのイデオロギー的な差異を無視し表面上見えなくすることは、保守主義が社会を支配する時代において、

ソーシャルワークには脅威となると指摘した。イデオロギーの違いは、実践を構成する具体的な活動を異なるものにし、ソーシャルワーカーが尽力し配慮をするクライアントにも異なる意味をもたらすと主張したのである (Longres, J. F. 1981: 85)。

### III. ソーシャルワークの理論とイデオロギーの関係

理論とイデオロギーは、日々の実践を暗黙的にも、意識的にも導くものといえる。Lundy, C. (2004) は、「確立した諸理論は、共通のイデオロギー、つまり、他の理論やアプローチとは異なる見解や解釈を表す一連の信念や仮定や価値を共有する」(Lundy, C. 2004: 55) と述べる。

しかし、ソーシャルワークの実践現場では、一般に、経験的価値が重視され、理論が無視される傾向がある。Howe (1987) の説明によれば、私たちは日常生活のなかで理論を用いていることに気づかないまま理論を用いている。私たちの認識は、理論から決して自由ではない。人と社会とその関係の本質は一定の仮説に基づいたものである。当然視された現実 (理論) は、科学的に構築された理論ではなく、個人的につくられた理論である。理論は、出来事や変化の現象を記述し、説明し、予測し、統制・管理することを基本的な機能として果たすものといえる。

私たちのもつ仮定や信念は、社会的・個人的状況を理解し対応するときに、レンズの役目を果たす。例えば、生田 (2008) は、釜ヶ崎で日雇い労働者・野宿者支援活動に関わる傍ら、学校教育で野宿者問題の授業を行ってきた。そのなかで、「野宿者を襲撃する少年」には、「野宿者、ホームレスは自業自得ではないか」「貧困になるのは自己責任だ」という、大人社会のもつ無知や偏見がすりこまれていると言う。

個人の弱さや自己責任を強調し、社会システムの犠牲者を非難する態度には、特定のイデオロギーのもつ価値観や信念が反映されている。ソーシャルワーク実践においてイデオロギーや理論が果たす役割や影響は、ソーシャルワークの性格や形態の本質的な部分にかかわるといえる。

ソーシャルワークの概念的枠組みに関する作業部会の議論では、専門分化する専門職を統合し、共通のソーシャルワークの使命や目的を基礎にした、概念的モデルを体系化することが課題とされていた。しかし、ソーシャルワークの概念的枠組みは、「機能主義の学説に依拠するソーシャルワーカーと、マルクス主義の学説に依拠するソーシャルワーカーとの違いが際立った」(Lundy

2004: 38) ものとして指摘されている。

ソーシャルワークの概念的枠組みを体系化しようとするなかで、機能主義とマルクス主義というイデオロギーの違いは、ソーシャルワークにとってどのような違いとして理解できるのか、次に主要な文献を調べることにする。

#### 1. 機能主義の学説に依拠するソーシャルワーカー

機能主義的学説に基づくソーシャルワークは、Howard Goldstein の *Social Work Practice: A Unitary Approach* (1973)、そして Allen Pincus and Anne Minahan の *Social Work Practice: Model and Method* (1973) に代表される。それらの方法は、ソーシャルワーク実践を統合する枠組みとして一般システム理論が用いられている。機能主義的アプローチでは、問題の源泉を個人に焦点化する精神分析的アプローチにかわり、人と問題を環境に結びつけて捉える。社会は諸個人の集合と理解され、すべてはより大きなシステムの相対的調和のなかで相互作用のある様々な規模の下位システムからなると考えられる。その中心的な仮説は、人々が諸システムに依存しているという考え方である。問題は人々が相互作用するシステム、すなわち家族や学校、職場、サービス事業者など、人々とシステムの相互作用が崩れることから生ずるものとみられる。基本的目標は、システムの均衡をとりもどすことにあり、社会的脈絡は考慮されるものの、広範な社会変革に結びつくものではない。

Pincus, A. and Minahan, A. (1973) では、政治的な関与を避ける。社会変革への参加の必要性は認めながらも、「社会制度の基本構造に根本的変化をもたらす目的的活動は支持されない」と明白に述べられている (Pincus, A. and Minahan, A. 1973: 27; Lundy, C. 2004: 35)。

それぞれの著者によってシステム理論の応用に違いはあるものの、専門職を統合し、個人と社会の双方に焦点をもつ、ケースワーク、グループワーク、コミュニティワークの実践の諸方法を統合するモデルを提供しようとする点では一致がみられる。

この他に、Germain, C. B. and Gitterman, A. (1996) の *The Life Model of Social Work Practice* (1996) がある。彼らは生態学思考に基づいて、人と環境の交互作用に焦点をあてる。ライフ・モデルは、環境の改善や社会行動 (cause) と個別化の方法や技術 (function) の双方に対する人々のニーズを統合する必要性に応えようとする (Germain, C. B. and Gitterman, A. 1996: 365)。しかし、これも社会変革に向かうソーシャルワークを展開していくことはなかった。

機能主義的学説に基づくソーシャルワークは、精神的なアプローチによる個人への焦点化から、個人の家族や地域へと焦点を移行させる点で評価される。しかし、政治的・経済的な諸力への認識が不足すると感じた人々は、マルクス主義的な学説へ向かった (Lundy, C. 2004: 35-6)。

## 2. マルクス主義の学説に依拠するソーシャルワーカー

機能主義の学説に批判的な立場からは、既存のソーシャルワークにかわるオルタナティブなものとして、マルクス主義的アプローチ、ラディカル・アプローチ、クリティカル・アプローチ、構造的アプローチと呼ばれる実践の枠組みが提起された (Lundy, C. 2004: 36)。

マルクス主義の学説に依拠するソーシャルワークでは、機能主義の学説のようにソーシャルワークのモデルがつくられることはなかった。そのかわりに強調されたのは、社会と社会的諸問題の分析であった。その社会分析自体が、ソーシャルワーク実践の目標とされてきた。

ラディカル・ソーシャルワークのテキストが出版されたのは、1975年、1つはイギリスの社会学者で活動家の Roy Bailey and Mike Brake の *Radical Social Work*、もう1つはアメリカのソーシャルワーカー、Jeffrey Galper の *The Politics of Social Services* である。1970年代の後半、北アメリカとイギリスに保守政権が誕生し、社会福祉の縮小と社会サービスの削減によって福祉国家の後退が余儀なくされる。その時期に、ラディカル・ソーシャルワークの立場から、社会福祉、国家、社会的諸問題に対する分析を示す著書が欧米で相次いで出版された (Mullaly, B. 1997)。

Bailey, R. and Brake, M. (1975: 9) によれば、ラディカル・ソーシャルワークは、生活の行われる社会的・経済的構造の脈絡で、抑圧された人々の立場を本質的に理解しようとするものである。そこでは社会主義の視点が、最も人間的なアプローチと考えられる。その目的は、ケースワークを除去するというのではなくむしろ、統治階級の支配的権力を支持するケースワークを除去しようとするにある。

Galper, Jeffrey H. (1975: x) は、資本主義それ自体に対する社会サービスのもつ構造的・イデオロギー的關係に言及する。その政治的分析は、社会サービスのもつ問題を、社会のもっとも根本的な組織原理に深く植え付けようとするものである。実践としての社会改革も、社会主義の根本原理の上に組織する社会的な創造を追求する闘いとすることがために、ラディカルなものである。

Corrigan, Paul and Leonard, Peter の *Social Work Practice*

*Under Capitalism: A Marxist Approach* (1978) は、Peter Leonard が編者として出版した “Critical Texts in Social Work and the Welfare State” シリーズの一冊である。このシリーズは、英国の福祉の現場のワーカーに経験される怒りや罪の意識、無力感の一方で、クライアントに対して権力的でありすぎると感じる思いなど、ソーシャルワーカーの現実に関わる危機を経済的、政治的、イデオロギー的に、英国の歴史的脈絡や資本主義社会の危機と結びつけて分析、説明をする。マルクス主義に依拠する実践の視点にある第一の強調は、私的な困難を、それを取り巻く社会的問題と結びつけて把握する点である。

ソーシャルワーク理論とイデオロギーの関係、イデオロギーの違いによるソーシャルワークの差異について、特に、機能主義とマルクス主義の立場について主要な文献を通してその主張を調べた。このようなイデオロギー的差異に基づくソーシャルワークの諸理論/アプローチの違いについて、上述した学説以外にも、ソーシャルワークのメタ理論を俯瞰することのできる枠組み、あるいは認知的な地図を、私たちは必要としている。次に、ソーシャルワークの認知的枠組みをどう描くか、これまでの先行研究を振り返り、ソーシャルワークの目的に最も適う理論/アプローチは何かを考えることにする。

## IV. ソーシャルワークの諸理論/アプローチとイデオロギーの枠組み

### 1. 「レギュレーションの社会学」-「ラディカル・チェンジの社会学」と「主観」-「客観」の2次元、4つのパラダイム

ソーシャルワークのアプローチを組織化しようと試みた先行研究として、Carniol, B. (1984)、Whittington, C. and Holland, R. (1985)、Howe, D. (1987)、Lundy, C. (2004: 54-55) の業績がある。彼らは、Burrell, G. and Morgan, G. (1979) の枠組みを用い、ソーシャルワークのアプローチを組織化している点で共通している。

Burrell, G. and Morgan, G. (1979) は、社会理論を4つのキー・パラダイムの観点から理解することを示した。4つのキー・パラダイムは、社会科学の性質ならびに社会の性質に関して、それぞれ異なるメタ理論の仮説のセットをもとに、社会的世界に関する相互に排他的な見解に基づく独自の理論と展望を生み出した (Burrell, G. and Morgan, G. (=1986))。

Burrell, G. and Morgan, G. (1979) は、社会に関する2つの理論、すなわち、「秩序」-「葛藤」の議論を、「レギュレーションの社会学」と「ラディカル・チェンジの社会学

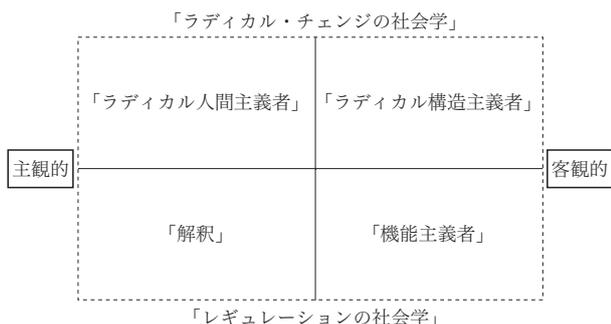


図1 4つのパラダイムによる社会理論の分析  
Burrell, G. and Morgan, G. (=1986: 28)

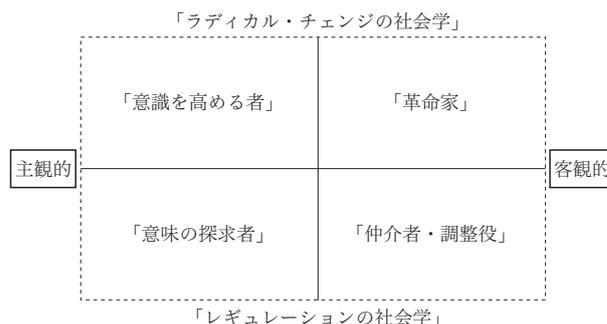


図2 Howe, D. (1987: 50) の、Burrell, G. and Morgan, G. (1979) を基に描いた、ソーシャルワーカーの志向

学」の観念に置き換え、社会理論の次元として提示した。「レギュレーションの社会学」は、現状、社会秩序、一致、社会的統合と凝集性、連帯、欲求充足、現実性に関心をもつ。「ラディカル・チェンジの社会学」は、急進的変動、構造的コンフリクト、支配の諸様式、矛盾、解放、剥奪、可能性に関心をもつ。

また、Burrell, G. and Morgan, G. (1979) は、社会科学の諸アプローチを特徴づける存在論、認識論、人間性、方法論に関する多様な立場について、2つの大まかな対極的展望、すなわち「主観」「客観」の次元の観点から説明した。彼らは、「主観」「客観」の次元と、「レギュレーションの社会学」「ラディカル・チェンジの社会学」の次元を組み合わせ、図1のように、4つの独自の社会学的パラダイムを規定して示した (Burrell, G. and Morgan, G. (=1986: 26-28))。

「機能主義者」パラダイムは、「レギュレーションの社会学」に基礎をもつ展望と、客観主義者の視点からアプローチする。現状、社会秩序、一致、社会的統合、連帯、欲求充足、現実性に対する説明を提示しようとする関心によって特徴づけられる。現実主義者、実証主義者、決定論者、法則定立的な傾向をもつ視点からアプローチする (Burrell, G. and Morgan, G. (=1986: 32))。

「解釈」パラダイムは、「レギュレーションの社会学」に一致し、主観主義者の視点からアプローチする。唯名論者、反実証主義者、主意主義者、ならびに個性記述的な傾向がある。現状、社会秩序、一致、社会的統合と凝集性、連帯、現実性の性質と関連した諸問題とかかわる (Burrell, G. and Morgan, G. (=1986: 35, 38))。

「ラディカル人間主義者」パラダイムは、主観主義者の立場から「ラディカル・チェンジの社会学」を展開しようとする関心によって定義される。唯名論者、反実証主義者、主意主義者、ならびに個性記述的な傾向をもった展望からとらえようとする。ラディカル・チェンジ、

支配の諸様式、解放、剥奪、ならびに潜在可能性を強調する (Burrell, G. and Morgan, G. (=1986: 39-40))。

「ラディカル構造主義者」パラダイムは、客観主義者の観点から「ラディカル・チェンジの社会学」を支持する。ラディカル・チェンジ、解放、ならびに潜在可能性に関与し、構造的コンフリクト、支配の諸様式、矛盾、ならびに剥奪の分析を強調する。現実主義者、実証主義者、決定論者、ならびに法則定立的な傾向を持った視点からアプローチされる (Burrell, G. and Morgan, G. (=1986: 42))。

Whittington, C. and Holland, R. (1985) は、ソーシャルワーク教育にとって最も重要なことは、仮定の探求を行うことができるようになることであると述べる。学生が実践に持ち込む仮定、あるいは実践者に差し出される諸理論にはめ込まれた仮定を自ら調べることができるために、多くの視座を体系的に組織化する基本的枠組み、あるいは認知的マップを用いる。彼らは4つのパラダイムについて特徴となる社会、社会的諸問題、ソーシャルワークの目的に関する見解を概説している。

Howe, D. (1987: 50) は、Burrell, G. and Morgan, G. (1979) の社会理論の分析を基に、ソーシャルワーカーの志向を重ね描いた。図2のように、①左上象限「ラディカル人間主義者」パラダイムを「意識を高める者」と名づけ、フェミニストの理論を例示した。②右上象限「ラディカル構造主義者」パラダイムは、ソーシャルワーク実践の主流の考えに挑戦する「革命家」と名づけ、マルクス主義ソーシャルワークを例示した。③左下象限「解釈」パラダイムは、「意味の探求者」と名づけ、クライアント中心のアプローチを例示した。④右下象限「機能主義者」パラダイムは、「仲介者・調整役」と名づけ、精神的分析的な伝統と行動療法的なソーシャルワークの2つを例示した。

Carniol, B. (1984) は、パラダイムの概念というよりも、

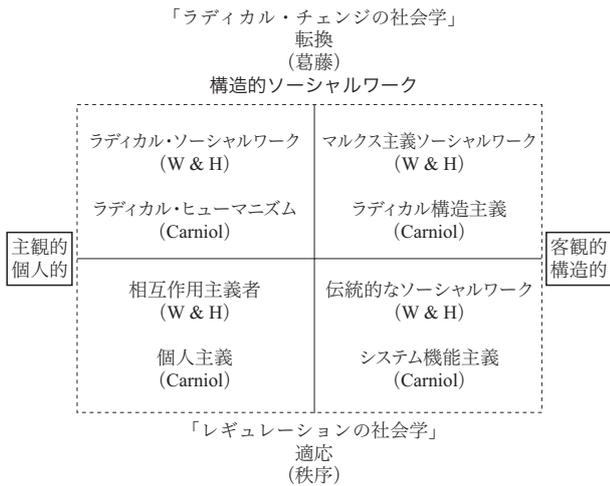


図3 ソーシャルワークのアプローチの枠組みの組織化  
Lundy, Colleen (2004: 54)

もう少し融通性のあるイデオロギー的パースペクティブの用語を用い、個人主義者（解釈）、システム機能主義者、ラディカル人間主義者、ラディカル構造主義者に対応する、保守主義者、自由主義者、民主社会主義者、マルクス主義者のイデオロギー的仮定について説明した。その枠組みのどのイデオロギーが他のイデオロギーと比べてより役立つのかは、特定の視座を擁護する集団や利害関係者は誰であるのか、その信念を受け入れることで利益を得るのは誰であり、不利益を被るのは誰であるかを問う批判分析が行われなければ、答えられないと述べられる。

Lundy, C. (2004: 54-5) は、Carniol, B. (1984) の「イデオロギー的次元およびイデオロギー的視座」と Whittington, C. and Holland, R. (1985) の「ソーシャルワークのパラダイム」を、図3のように重ね合わせ、ソーシャルワークのアプローチを4象限の図で表した。「主観」-「客観」（あるいは「個人」-「構造」）の次元と、「レギュレーションの社会学」-「ラディカル・チェンジの社会学」（あるいは「秩序」-「葛藤」/「適応」-「転換」）の次元を組み合わせたものである。

①左上象限 [主観（個人）・ラディカル・チェンジの社会学（転換/葛藤）] の「ラディカル・ソーシャルワーク」(Whittington, C. and Holland, R. 1985)、「ラディカル・ヒューマニズム」(Carniol, B. 1984)。

②右上象限 [客観（構造）・ラディカル・チェンジの社会学（転換/葛藤）] の「マルクス主義ソーシャルワーク」(Whittington, C. and Holland, R. 1985)、「ラディカル構造主義」(Carniol, B. 1984)。

③左下象限 [主観（個人）・レギュレーションの社会学

（適応/秩序）] の「相互作用主義」(Whittington, C. and Holland, R. 1985)、「個人主義」(Carniol, B. 1984)。

④右下象限 [客観（構造）・レギュレーションの社会学（適応/秩序）] の「伝統的なソーシャルワーク」(Whittington, C. and Holland, R. 1985)、「システム機能主義」(Carniol, B. 1984)。

そして Lundy, C. (2004: 54-55) は、構造的アプローチを、社会的諸問題に取り組むにあたってもっとも期待できる有望なものとして、「ラディカル・チェンジの社会学」（転換的アプローチ）の、「主観」と「客観」または「個人」と「構造」の両方の次元を橋渡しする場所に位置づけた。

個人的変化と社会的変革の二重の焦点への関心は、ソーシャルワーク専門職の発端から続いてきた。「私的」-「公的」、「個別的」-「社会的」、「個人的」-「政治的」というように、これらの対概念は緊張関係を表している。いずれか1つを選択するという主張もあれば、局面毎に異なるソーシャルワーク実践を念頭に、二重性の維持と拡大をすすめる主張もあった。また、「社会的」-「個人的」との間を媒介することにソーシャルワーカーの役割・機能を位置づける者もいた。そのなかで、Lundy, C. (2004) は、2つの視点を1つのものに、「個人的なものは政治的である」こと、また個別的サービスと社会行動は同じ行為の部分をなすものと捉え、効果的な実践のための統合案を提示したことで評価される (Lecomte, R. 2004)。

## 2. Coates, J. (1992) の場合

上述した以外に、Coates, J. (1992) は、ソーシャルワーク実践を先に3つのアプローチ、すなわち、「個人に問題（欠陥）」があるとみなすアプローチ、「生態学的アプローチ」、「政治経済的アプローチ」に分けた。そして、それぞれのアプローチは、異なるイデオロギーの立場、つまり、保守主義、自由主義、社会主義/フェミニストから生じたものと要約される。そして、1事例を用い、おのおのアプローチに固有の仮説から、異なる問題定義や実践介入を示した。これらのアプローチのなかで唯一「政治経済アプローチ」が、社会的転換を促進する介入方法として支持された。

「個人に問題（欠陥）」があるとみなすアプローチは、現在の社会・経済・政治体制は基本的に健全であるとみる保守主義のイデオロギーに依拠するものと考えられる。この見解では、病気や能力を欠いた諸個人を改善し再訓練する機会を提供するのは、恵まれた人の義務とみる。このアプローチでは、個人的・社会的諸問題は逸

脱と捉える。このイデオロギーによるソーシャルワーク介入は、社会の主流へもどれるように「欠陥」を克服するための支援に焦点があてられる。

「生態学的アプローチ」は、人々と社会的環境の相互作用を強調し、個人と社会の間の最適な適合をめざす。例えば、適切な住宅保障が困難な状況や、貧しい教育、不適当な所得手当など、人々が健全に社会で機能するために必要な資源が環境的な諸力により否定されることへ注意を払う。その点で「個人に問題があるとみなすアプローチ」とは異なっている (Coates, J. 1992: 20)。

「生態学的アプローチ」は、資本主義/民主主義/家父長制の社会秩序が最善のものと仮定する自由主義のイデオロギーとほぼ一致する。社会的な不平等への感受性はあるものの、交互作用を強調するため、社会秩序の根本的な性格を疑問とすることは抑制される。性差別主義、人種差別主義、貧困のような諸問題は認識されても、その根本原因を扱うことはしない。ソーシャルワーカーは、媒介者、代弁者、ケースマネージャーとして、必要なサービスや施策の向上を保証するために働く (Coates, J. 1992: 20-21)。

「個人に問題があるとみなすアプローチ」、「生態学的アプローチ」、どちらも現在の社会・経済的な配置を健全なものとする。個人主義、家父長制、競争、平等な機会、私的財産の蓄積など、この体制を支持する価値を受け入れる。政策やソーシャルワーク介入では、恵まれない人への支援においては情け深いことを主張する。しかし、資本主義の構造に起因する貧困を疑問とはせず、従って社会政策が社会的諸問題を根絶することはない。搾取や貧困は、そのままにされる (Coates, J. 1992: 20-22)。

「政治経済アプローチ」では、自由主義/資本主義/家父長制の社会秩序を、社会的諸問題の直接的要因と仮定する。ソーシャルワーク介入の優先は、苦悩の軽減と基本的に必要なものの供給であるが、長期目標は社会構造の根本的な転換である。「政治経済アプローチ」は、社会主義およびフェミニストのイデオロギー、そしてカナダ・ソーシャルワーカー連盟の倫理綱領とほぼ一致する。それは社会正義、平等主義、人間主義に基づく社会秩序を支持する。社会的諸問題の定義は、1つの集団がもう1つ別の集団を利己的に利用することを支持する体制、それによってもたらされる不可避的な結果と捉えられる。例として、制限のない自由企業の目標は富の最大化であり、家父長制の目標は男性支配の確立である。不公正な社会的秩序の犠牲者が必然的に生まれる。社会的諸問題の根絶はすべての人々に変革を求めるものであ

る。既存の支配的価値を社会正義の価値に置き換える改革と考えられる。サポート、意識向上、エンパワーメント、積極性訓練のような行動療法は、社会的諸問題と個人的諸問題との間の結びつきを理解するための話し合いを導くものとして活用される (Coates, J. 1992: 22-23)。

### 3. Ife, J. (1997) の場合

今日の経済のグローバル化が加速するポスト福祉国家の時代におけるソーシャルワークの現実を捉えるために、上述してきた枠組みの他に、Ife, J. (1997) の枠組みについて取り上げる。

Ife, J. (1997) は、図4に示すように、競合するヒューマンサービスのディスコースを四象限の図で表した。

「権力」の諸次元を「階層的」と「無政府状態」として垂直線の上・下に位置づけ、「知識」の諸次元を「実証主義者」と「人間主義者」として水平線の左・右に位置づけた。

①左上象限の「経営管理」のディスコースでは、福祉の性格は生産・製品とされる。福祉の受取人は消費者、ソーシャルワークの役割はケースマネージャーである。責任は経営管理にあり、方針はよりよいマネジメントである [階層的・実証主義者]。

②左下象限の「市場」のディスコースでは、福祉の性格は商品となる。福祉の受取人は顧客、ソーシャルワークの役割は仲介者とされる。責任は顧客の選択にある。方針は競争・民営化・規制緩和である [無政府状態・実証主義者]。

③右上象限の「専門職」のディスコースでは、福祉の性格はサービスとされる。福祉の受取人はクライアント、ソーシャルワークの役割は専門的サービスである。責任は専門職団体・倫理綱領にあり、方針は専門的訓練、資格、雇用となる [階層的・人間主義者]。

④右下象限の「コミュニティ」のディスコースでは、

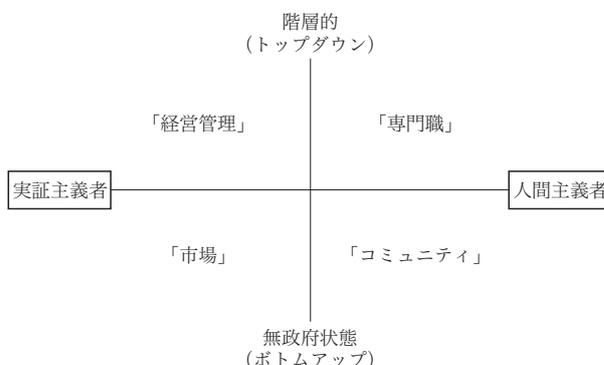


図4 ヒューマン・サービスの競合するディスコース  
Ife, J. (1997: 56)

福祉の性格は社会活動・参加である。福祉の受取人は市民、ソーシャルワークの役割はコミュニティワーカー・イネーブラーである。責任は民主的な意思決定にある。方針は分散・地方分権化・非集中化である〔無政府状態・人間主義者〕。

上述のように、ヒューマン・サービスの理論的枠組みの分析的図式のなかでソーシャルワークの役割・責任・方針が述べられる。そこではイデオロギーという言葉は用いられず、ディスコースが用いられる。権力の所在は、国家に位置づけられるというよりは、あらゆる場所、刑務所・学校・施設・病院・福祉事務所などの社会的脈絡において見出されるものと捉えられる。Foucault, M. (=1986: 119-120) が言う「無数の力関係」として権力のメカニズムをみる。普遍主義と歴史的連続性や連帯に強調点を置くモダニズムに対し、差異やローカルな現実や断片化に強調点を置くポストモダニズムの視点が含まれる。ソーシャルワークの置かれている現実の多元性・多様性・複合性を反映する枠組みともいえる。しかし、その図式からだけでは、何が真実で、何が正しいのか、あるいはどこへ向かうべきかは、わからない。

## V. まとめ

グローバル化が進展する社会では、人々が共通に直面する多様な社会的諸問題がある。経済低迷下で生ずる失業、賃金収入の減少・喪失、住居の喪失、地域社会や家族の崩壊、児童・高齢者・障害者など社会的弱者への虐待やネグレクトの増加が顕著になる。既存の社会構造の犠牲となっている被抑圧的集団の声に耳を傾け、抑圧からの解放に焦点をあてたソーシャルワーク実践の理論的な構築が求められている。

現代の資本主義社会の構造がもたらす歪みの犠牲となっている人々の問題について、ソーシャルワークはどうアプローチするのか、また、すべきなのか。ソーシャルワークの目的が何であるかを根本的に問いつつ、ソーシャルワークの理論とそのイデオロギーを認識するための枠組みについて検討した。その分析的な図式を用いて、ソーシャルワークの目的や形態、問題の定義、実践のアプローチが異なることについて調べた。

グローバル資本主義に伴う社会・経済的変化は、人間主義や平等主義を基本的価値とするソーシャルワークの根元を侵食し、その性格や形態を変容させてきた。他方で、福祉国家を理想とするディスコースの多くは、ポストモダニストやフェミニストによる挑戦を受けてきた。多様性や差異に敏感であることや選択的な相対主義は、

イデオロギーを退けるものでもあった。

これまでの伝統的なソーシャルワークは、社会的・政治的・経済的脈絡の分析的な理解とは隔たりをもつ。社会変革や社会正義への関心というよりはむしろ、個人的諸問題とその身近な環境へ焦点を限定してきた。Ife, J. (1997) の枠組みに照らし、例えば、高齢者の介護保険制度におけるケアマネジメントをみれば、「専門職」のディスコースや「コミュニティ」のディスコースよりも、「経営管理」のディスコースや「市場」のディスコースが全体を支配する勢いをもつに至っている (Ife, J. 1997; その一例として、田川 2011)。

イデオロギーに対する気づきを促す理由は、個別的諸問題を社会経済的状況や構造的脈絡に位置づけて捉え返す分析や、その実践を導く理論/アプローチに言及するためである。

ソーシャルワークとイデオロギーの理論的枠組みや認知的マップを再検討することからは、ソーシャルワーク実践の性格や形態を客観化することが可能となる。そして、現在、当然視されている現実を対象化し、目指すべきオルタナティブなビジョンを発見し、その実現へ向け一歩を踏み出すことができるようになる。このイデオロギー分析は、ソーシャルワークのミクロとマクロの二又構造を橋渡しする統合アプローチを探求するための理論的基礎となりうる。

たとえソーシャルワークの仕事の最優先課題が、社会的な不平等や疎外・搾取されている人々への支援やアドボカシーではないとしても、この社会的・経済的脈絡の諸力についての理解は、実践がソーシャルワークの倫理綱領にある社会正義とヒューマンイズムに沿ったものであることを担保するために必要なものと考えられる。

構造的な分析は、個人的なものや政治的のものを結びつけ、抑圧の個人的経験を広範な政治的理解と関連づける (Mullaly, B. 2007)。構造分析では、抑圧と搾取を普遍的な現象として捉えるものの、その一方で、異なる脈絡、異なる場所、異なる人々に、異なって経験される抑圧や搾取の差異については関心が行き届かないことがある。

1つの現実や、社会に理想的な秩序を求める信念システム、こうした普遍的な真実に対するモダニストの主張に対して、ポストモダニストは、異なる現実が、異なる脈絡や異なる行為者によって絶えず定義・再定義されると主張される。ソーシャルワークの理論における、このモダニストとポストモダニストの主張は、各々の弱みを各々の強みによって相補うことが求められる。

ここでは、グローバリゼーションの時代に人々が抱える諸問題に対応できるソーシャルワークとは一体どのよ

うなものであるのか、またあるべきかを問い、それに見合う理論再編の基礎となる枠組みについて検討を行った。ここでは理論とイデオロギーの關係の分析的記述、そして認識的枠組みの検討を必要とした。未だ、理論的再編のための枠組みの全体像を明晰に述べるまでに至らないでいるが、その理論的枠組みを構成する要素として、ラディカルなもの、秩序と葛藤の理論、主観的なものと客観的なもの、イデオロギーを中心に取上げた。そして、ディスコース、モダニストとポストモダニストの主張、権力と知識のあり方を含め、今後さらに検討していく必要があると思われる諸要素についても少し触れておいた。

#### 付記

これは、平成22年度科学研究費補助金、基盤研究(C)の交付を受けて行った研究の成果を一部まとめたものである。研究課題名：ソーシャルワーク理論の再検討——パラダイム・イデオロギー分析(課題番号：20530516)、研究代表者：田川佳代子(沖田佳代子)

#### 文献

Bailey, Roy and Brake, Mike (eds.), (1975) *Radical Social Work*. New York, Pantheon Books.

Burrell, Gibson and Morgan, Gareth (1979) *Sociological Paradigms and Organisational Analysis*. London: Heinemann Educational Books. (=1986、鎌田伸一・金井一頼・野中郁次郎訳『組織理論のパラダイム——機能主義の分析枠組み』千倉書房。ただし、前半部分の訳出。)

Brieland, Donald (1977) Historical overview, *Social Work*, 22.5, 341-346.

Carniol, Ben (1984) Clash of Ideologies in Social Work Education, *Canadian Social Work Review*, 184-199.

Coates, John (1992) Ideology and Education for Social Work Practice, *Journal of Progressive Human Services*, Vol. 3 (2), 15-30.

Corrigan, Paul and Leonard, Peter (1978) *Social Work Practice Under Capitalism: A Marxist Approach*, The Macmillan Press.

Ephross, Paul H. and Reisch, Michael (1982) The Ideology of Some Social Work Texts, *Social Service Review*, June, 273-291.

Foucault, Michel (1976) *La Volonté De Savoir*. (Volume 1 de *Histoire De La Sexualité*) Éditions Gallimard. (=1986、渡辺守章訳『性の歴史 I 知への意志』新潮社)

Galper, Jeffrey H. (1975) *The Politics of Social Services*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.

Germain, Carel B. and Gitterman, Alex (1996) *The Life Model of Social Work Practice*. New York, Columbia University Press.

Gilbert, Neil (1977) The search for professional identity, *Social Work*, 22.5, 401-406.

Goldstein, Howard (1973) *Social Work Practice: A Unitary Approach*.

Columbia, SC: University of South Carolina Press.

Horton, John (1966) Order and Conflict Theories of Social Problems as Competing Ideologies, *The American Journal of Sociology*, LXXI. 6. May 1966, 701-713.

Howe, David (1987) *An Introduction to Social Work Theory*, Aldershot, UK: Wildwood House. 12.

Ife, Jim (1997) *Rethinking Social Work: Towards critical practice*, Longman. 12-23, 47-56.

生田武志 (2008) 「学校で野宿問題の授業を——『極限の貧困』問題と教育の課題」『世界』<http://www1.odn.ne.jp/~cex38710/sekai200804.htm> (アクセス日 2011, 4. 7)

Lecomte, Roland (2004) Forward, in *Social Work and Social Justice*, by Colleen Lundy, xi-xiii.

Longres, John F. (1981) Reactions to Working Statement on Purpose, *Social Work*, 26.1, 85-87.

Lundy, Colleen (2004) *Social Work and Social Justice: A Structural Approach to Practice*, broadview.

Meyer, Carol H. (eds.), (1983) *Clinical Social Work in the Eco- Systems Perspective*. Columbia University Press.

Minahan, Anne and Briar, Scott (1977) Introduction to special issue, *Social Work*, 22.5, 339.

Minahan, Anne (1981) Introduction to special issue: Purpose and Objectives of Social Work Revisited, *Social Work*, 26.1, 5.

Mullaly, Bob (1997) *Structural Social Work, Ideology, Theory, and Practice*, Second Edition, Oxford.

Mullaly, Bob (2007) *The New Structural Social Work*, Third Edition, Oxford.

岡本英男 (2004) 「福祉国家財政論の到達点と今後の課題」、林建久ら編『グローバル化と福祉国家財政の再編』東京大学出版会、287-314.

Pincus, Allen and Minahan, Anne (1973) *Social Work Practice: Model and Method*, Itasca, IL: F. E. Peacock Publishers.

田川佳代子 (2011) 書評「山井理恵著 利用力/提供力を促進するケアマネジメント——支援困難なクライアントに対する実践活動の質的研究」『社会福祉学』52巻1号、135-137.

武田宏 (1989) 「福祉補助金削減と自治体財政」成瀬龍夫ら『福祉改革と福祉補助金』ミネルヴァ書房、74-75.

Vodde, Rich and Gallant, J. Paul (2002) Bridging the Gap between Micro and Macro Practice: Large Scale Change and a Unified Model of Narrative-Deconstructive Practice, *Journal of Social Work Education*, Vol. 38, No. 3 (Fall), 439-458.

White, M. and Epston, D. (1990) *Narrative means to therapeutic ends*. New York: Norton.

Whittington, Colin and Holland, Ray (1985) A Framework for Theory in Social Work, *Issues in Social Work Education*, Vol. 5, No. 1, Summer, 25-50.

山縣文治・岡田忠克編 (2008) 『よくわかる社会福祉』第6版、ミネルヴァ書房、2.

八代尚宏 (2000) 「福祉の規制改革」八代尚宏編『社会的規制の経済分析』日本経済新聞社、133-167.

## The Theoretical Frameworks of Social Work and Ideology

—Acting as a Mediator between Macro and Micro Practice—

TAGAWA Kayoko

In the advancement of globalization, there are social problems people face in common. These problems include unemployment, reduction/loss of wage income, loss of dwelling place, community or family breakup, and increasing number of abuses and neglects against socially vulnerable people such as children, elderly people and disabled people arising in the economic stagnation. A consideration was made as to how social work approaches and should approach the problems of victims suffering from the distortion caused in the structure of modern capitalist society.

The grand design of study is to clarify what kind of social work can solve social problems in the age of post welfare state and to seek to redefine/reconstruct social work. This study seeks to explore theoretical basis or framework and its constituting elements in pursuit of alternative practice with a perspective to objectivize the existing social systems.

Based on the consistent points and discussions by Lundy, C. (2004), a discussion has been made on the differences among the ideologies in the conceptual frameworks of social work. Clarification has been made as to how the purposes and methods of social work, the definitions of problems, and the practical interventions differ in different theories or ideologies on which social work is based. Furthermore, a consideration was made on the roles of ideology in social work and its practical meanings.

The groundwork of social work practice has been to help people redefine their private troubles as social problems positioned in a systemic context and collaborate for solution of the problems through human connection, instead of remaining in the isolated state where each individual is suffering from his/her own troubles.